

平成十四年一月二十日(日)

越谷市郷土研究会

研究発表会

13 / □

越谷

の

力ま

と

行司

越谷市郷土研究会 常任理事

高崎力

相撲略史

高橋 力

三〇〇〇年前
二〇〇〇年前

中国の「礼記」に「力を角(きそ)わしむ」

中国の「漢書」に「秦の武王、角を好む」「角抵の戯をなす」

註——角とは角枝(力くらべ)、抵とは抵触(ぶつつかり合い)、

両々相当たり力を角(きそ)う。

七二二 和銅5年 一月「古事記」成る。「角抵」の記述あり。

七二〇 養老4年 五月「日本書紀」成る。「相撲」の記述あり。

七二六 神亀3年 初めの「相撲節会」の記録に「裸なる姿」とある。

七三四 天平6年 七月七日 聖武天皇相撲天覧。以後宮中行事となる。

九〇五 延喜5年 「相撲節会」は「射礼節」「騎射節」と並び宮中の「三度節」となる。

一一七四 承安4年 七月の相撲節会で「大物言い」があり、高倉天皇が判定す(玉海より)。

以後途絶える。

一一八九 文治5年 四月三日、鶴ヶ岡八幡宮の祭事相撲あり(東鑑より)。

一一四九 応永26年 十月三日、山城国伏見郷法安寺造宮のため勅進相撲あり(看聞日記より)。

一五七〇 元龜元年 織田信長、江州常楽寺にて国中の相撲取を召し上覧(信長記より)。

一五七八 天正6年 二月、安土城にて江州国中の相撲取三〇〇人御覧。

この時、木瀬殿春庵・木瀬太郎大夫に行事を司る(総見記より)。

一五八〇 天正8年 六月、安土相撲。

一五八一 天正9年 四月、安土相撲。

一五九三 文禄2頃 豊臣秀次公の「取手」一〇〇人と「寄」の相撲二〜三〇〇人の相撲を上覧。

一五九六 文禄5年 京にて勅進相撲あり(義残後覚より)。

一六二四 寛永元年 三月十一日、江戸四谷塩町三丁目九番の笹寺にて晴天六日の勅進相撲興行(相撲大全・相撲

大鑑より)。境内に石碑あり。

註——これを江戸勅進相撲の起こりとす。但し、他に上野東叡山建立の地固め相撲説あり。

一六四八 慶安元年 二月二十八日、辻相撲停止される。

一六五七 明暦3年 この頃、旗本奴・町奴らが横行し検挙される。振袖火事あり。

一六五八 万治元年 十五世吉田追風、細川家(熊本)に仕える。

一六六〇頃(万治年間) 大名が力士を抱えなくなった。

一六六一 寛文元年 十二月、勅進相撲の禁令出る。

一六六五 寛文5年 六月、辻相撲の禁令出る。

一六八四 貞享元年 一月、深川新開地繁昌の名目で深川八幡宮境内で晴天八日間の勅進相撲許可。

この時、雷権太夫以下十五人が株仲間を結成し、興行の許可を得た。

——江戸勅進相撲の中興といわれている。

尚、この時から「寄方」を廢し、勅進方の力士を東西に分け、また老年者を「相撲年寄」と

して万事を取締る。許可の印として「蒙御免」の看板札始まり、現在の「番付表」にも記載

されている。

この後、株仲間、幕府に莫加金を上納し、営業認可を独占。

→ 相撲出身の年寄に独占される。

→ 「相撲会所」(株仲間?)

→ 更に現在の相撲協会へと変容する。

一六八九 元禄2年 浅草三十三間堂焼失し、深川へ移転。その地固めとして相撲興行する。
一六九九 元禄12年 五月二十八日、京都岡崎天王社修復勸進相撲あり。この時、大関・関脇・小結の三役名見える。
また、この時の相撲番付に「行司・吉田追風」とある。
この興行収益のうち、五〇両は天王社修復へ。
一〇両は在所へ。

一七二五頃(享保年間)「相撲基句」始まる。

一七四二 寛保2年 勸進相撲興行解禁。

次のように変容した。

1. 力士は渡世人となる。
2. 勸進元は、相撲出身が頭取・年寄になる。
3. 有力力士が一定し、連続して出場できる。
4. 四季勸進相撲興行となる。

江戸 春秋二回 十日間 寺社境内。

京 夏 十日間

大阪 秋 十日間

一七四九 寛延2年 八月、江戸相撲の行司木村庄之助・式守五太夫は、古実門人として吉田家第十六世追風に入門する。

一七五七 宝暦7年 十月、番付表東西二枚摺を一枚にし、二段目・三段目を設ければ現行の縦番付表に近くなる。

一七六一 宝暦11年 十月、勝負の「星取表」ができる。

一七六九 明和6年 四月、相撲場を深川八幡宮境内に移し、勸進相撲の常場所となる。

この時から江戸では一年二期(冬と秋)のうち一期は深川八幡宮、一期は江戸市中となる。
また、夏は京都、秋は大阪となる。

一七七〇 明和7年 現行の番付表になる。

この頃、全国に各々の相撲一門ができる。

一七七二 明和9年 越後国蒲原郡新城村(現、分水町)訴訟一件 素人相撲が木戸銭を徴収したことに江戸の

渡世力士がお上に訴えた。結果は素人相撲興行の木戸銭は禁止。但し、正規の相撲集団と対談し、土儀免状を得ての勸進興行は認める。

一七七三 安永2年 十月二十三日、土井速江守の申渡しにより、勸進相撲興行の制度確立する。

一七七五頃(安永年間)吉田家門下の行司が全国の行司となる。

一 吉田家は「本朝相撲司」と主張する。

一七七八 安永7年 三月、深川八幡社興行より晴天十日間となる。三都とも晴天十日間となる(以前は晴天八日間)。

年二回興行のための「一年を二十日で暮らすいい男」が流行。

年寄 弟子の養成に当たる。

相撲集団を作る。

各地の奉納相撲に出演。

以上、これらは現在の「部屋」に近い。

一七八九 寛政元年 十一月十九日、深川八幡宮境内の冬季大相撲興行六日目、土儀上で谷風・小野川両力士へ横綱

伝達式挙行。翌日両力士の横綱土儀入披露。

実際には、熊本藩の吉田司家が、谷風に横綱免許を、小野川に証状、六ヶ月後に横綱免許を出す。

一七九一 寛政3年 六月十一日、江戸城吹上上苑にて徳川家斎の上覧相撲を行う。

勸進元は綴山、行司に肥後熊本細川家臣吉田善左衛門追風を登用。

行司吉田追風は、谷風と小野川の取組みで小野川が「待った」の瞬間「勝負あり」と谷風に軍配団扇をあげた(小野川の気負け)。

一八二七 文政10年

この年から本所回向院が相撲の常定の地となり、「本場所」と呼ぶ。「他所」は「花相撲」「稽古相撲」と呼ぶ。

櫓太鼓は相撲場入口から東西国橋際へ移動した（江戸市中三橋の一つ）。

一八三三 天保4年

十月場所から両国回向院が年二回の定場所となる（一八〇九）まで続く。

一八六〇 安政7年

二月二十六日、来日中のペリー艦隊へ力士たちが米俵二百俵を積荷する。一人で二・三俵、白真弓は八俵を担ぎ、米水平を驚かせた。

大関小柳は米三人（二人はレスリング、一人はボクシング選手）を相手に大一番を打つ。

一八六九 明治2年

九段招魂社の火の鎮座祭に相撲を奉納。

一八七〇 明治3年

四月、天皇の陸軍観兵式の錦旗奉持役に上位力士が仰付かる。

一八七〇頃（明治初）

ザル碁といわれた七代目伊勢ノ海は、プロ碁初段の根本長蔵にあしらわれ、一勝一敗を樂しませて親方から金銭を引き出し、河童橋近くに八百屋（店名八百長）と相撲茶屋（店名島長）を手に入れ、「島長」は後に「八百長」と変名。

一八七一 明治4年

七月、麩藩置県により力士は大名の抱えを全く失う。

一八七二 明治5年

九段招魂社神殿造営工事に力士参加する（「御木引き」）。

一八七六 明治9年

東京相撲会所は「力士消防別手組」を設置し、二年間東京市の消防に協力。

一八七八 明治11年

二月、警視庁は「角舩（すもう）」並に行司取締規則及び興行場所取締規則を分布。
註一 力士・行司は警視庁より鑑札を受けること。組合は一つに限定する。

一八八四 明治17年

三月、相撲節会以来東方力士は葵、西方力士は夕顔をマゲに付けて入場していたが、葵と夕顔に代わって菊と桜になり、東西の花道に青竹の生垣に造花を挿し、勝力士に一本つつ造花を授けることになった。

三月十日、芝延遠館にて天覧相撲あり。

一八八九 明治22年

東京相撲会所を「東京大角力協会」と改称、設立。

申合規約として八十八の年寄名跡に固定（年寄株八十八株）。

後に大阪方との合併により大阪方頭取名跡十七名を加える。

その後も変動し、年寄定員一〇七名となる。

註一 年寄名跡の取得襲名とは、家督相続・引退した先代への扶養料の一括払といえようか。

一八九〇 明治23年

東京相撲番付に「横綱」が登場。初代は西ノ海。

このことは称号であった横綱から地位としての横綱になったといえる。

一八九七 明治30年

大阪に「大阪角力協会」が発足。

一九〇六 明治39年

三月、大相撲常設館建設国庫補助案可決。設計者は辰野金吾工学士。

一九〇九 明治42年

六月二日、両国国技館開館式。一三〇〇〇人収容。

「国技」とは江見水蔭の起草披露文中に「相撲は日本の国技にして・・・」から「国技館」と命名する。

東京相撲協会は「横綱」を最高力士に位置づけ、行司の服装は袴から直垂（ひたたれ）・烏帽子（えぼうし）になる。優勝力士の掲額始まる。投總頭（なげはな）禁止となる。

新橋クラブ事件起こる（給金・慰労金・養老金など）。

一九一三 大正12年

三河島事件起こる（養老金・給金など）。

一九二五 大正14年

東京・大阪の協会合併し、「大日本相撲協会」となる。

「引き分け」「預り」を廃し、「取直し」制度とする。

四月、赤坂東宮御所の皇太子（後の昭和天皇）の台覧相撲。

一九二六 大正15年

皇太子の台覧相撲時の下賜金で「東宮杯」を作製（現在の天皇杯）。

七月、東京相撲協会と大阪相撲協会の合併調印。

十一月、合同番付による連盟大相撲興行。

十二月、財団法人「大日本相撲協会」設立認可

一九二七 昭和2年 一月、合同後の初の本場所を東京で開催。

「引分け」「預り」を廃止し、「物言い」「水入り」「取直し」を正式採用。
年寄株一〇五株となる。

一九二八 昭和3年 一月、本場所のラジオ実況放送開始。

この時、仕切制限時間と土俵上に仕切線を設ける。

一九三〇 昭和5年 土俵の四本柱を背にしていた勝負検査役が土俵下に降りる。

一九三一 昭和6年 土俵の内円の直径が15尺(4・545メートル)になる。

それまでは、内円の直径が13尺(3・94メートル)で、内円16俵・外円20俵の二重土俵(◎)。

内円を撤廃して外側の20俵を残し、さらにその外側にマス型に俵を置いた(⊙)。

一九三九 昭和14年 春場所一月十五日、双葉山は安芸島により69連勝でストップ。

夏場所から15日間興行制になる。

一九四一 昭和16年 力士にも軍事訓練が実施され、「力士郷軍会」が組織された。

一九四五 昭和20年 三月十日の空襲で両国国技館被災。力士の焼死あり。

六月七日、被災した両国国技館を後片付けして一週間の場所開催。但し、非公開で軍人・

傷痍軍人がまばらに観戦。

一九四六 昭和21年 十一月、旧両国国技館で大相撲開催。

この時「相撲くじ」を発売(一枚十円)。

一九四七 昭和22年 十一月、東西対抗廃止し、一門系統総当たり制になる。

また、関脇以下に殊勲・敢闘・技能の三賞を制定。

一九四九 昭和24年 三場所制となる。

一九五〇 昭和25年 蔵前に仮設国技館できる。

横綱審議会を設置する(吉田司家に代わる権威づけ)。

仕切制限時間を改める。

幕内 十両 幕下

昭和3年 10分 7分 5分

昭和20年 5分 4分 3分

昭和25年 4分 3分 2分

一九五二 昭和27年 本建築の蔵前国技館完成。昭和59年9月まで興行場所となる。

土俵の四本柱取り払われ、房となる。

一九五三 昭和28年 大相撲のテレビ中継始まる。

一九五七 昭和32年 運営審議会を設置。福岡場所できる。

一九五八 昭和33年 名古屋場所でき、都合六場所制となる。

一九六〇 昭和35年 一月、相撲協会制定技は七〇手。

一九六一 昭和36年 九州場所で吉川町(現、吉川市)の宮崎吉之助(50歳)作製の土俵初登場。

一九六五 昭和40年 系統別取組みでは系統同士は当たらないので、部屋別総当り制になる。

一九七二 昭和47年 新弟子の入門は中学卒業以上二十三歳以下の男子、身長百七十三センチ、体重七十五キロ。

但し、大卒など幕下付出しは別。

一九八五 昭和60年 新国技館が両国に開館。

越谷出身の力士と行司

高崎 力

鍛冶山^{しとがやま} 喜吉平治伯(年寄 鍛冶山)

越谷出身の確たる証拠なし。安永9年(一七八〇)発刊「相撲地名評判記」に

「前頭 浪除半五郎

腰のよい足のつよいがこしがひの餅米」

とあり。「太郎兵衛橋」を引合いに出しているが、越谷出身とはいえない。

三郷市茂田井出身の鍛冶山喜平治の弟子。

安永5年(一七七六) 十月、浪除半五郎と名乗って序ノ口にでる。

天明2年(一七八二) 二月、宮戸川半五郎と改め、序二段に。

その後、序二段・三段目を上下する。

天明5年(一七八五) 二月、師匠亡くなる。

天明6年(一七八六) 年寄名「鍛冶山喜平治二代目」を継ぎ、大部屋だった鍛冶山部屋の経営を現役で任された。

天明8年(一七八八) 十月、土俵を降りる。

寛政元年(一七八九) 三月、正式に年寄を継承し、相撲会所のトップの筆頭を務める。

文政7年(一八二四) 六月二十五日、没。墓は台東区大円寺にある。

註一 中英夫著「武州の力士」には「三代目鍛冶山喜平治」とあるが、相撲博物館での調査では「三代目は大橋清五郎」になっているので、ここでは「二代目」とした。

荒井井山 大蔵

越谷市新川町(旧越巻村)出身(本名は不明)

榎山藤蔵弟子

嘉永2年(一八四九) 十一月場所到大角大蔵で西序ノ口29枚目に出る。

嘉永5年(一八五二) 二月、序二段。

嘉永6年(一八五三) 三段目。

安政4年(一八五七) 一月、幕下。

十一月、荒井山大蔵と改めたが、序ノ口27枚目に転落。

安政6年(一八五九) 十一月、幕下39枚目。

慶応2年(一八六六) 十一月、張出。

慶応3年(一八六七) 十一月、番付外。

慶応4年(一八六八) 五月、幕下36枚目。

明治元年(一八六八) 十一月、幕下。

明治4年頃より不明となる。

註一 なお、越谷市新川町には「相撲屋敷」と呼ばれる屋敷地が現存。

荒川 賢貞 弘伯(昭和55廃業カードには「賢次」とある)

昭和29・12・14生(本籍は北海道三笠市、荒川次郎長男)

昭和44・3・15 越谷市立北中学校卒。

昭和44・5・6 出羽海部屋入門。身長一七四センチ、体重一〇〇キロ。力士名「荒川」。

昭和44・6・2 相撲教習所入所。

昭和45・1・29 同所修了

昭和44・5 初土俵。

昭和44・7 2勝5敗 序ノ口 東20枚目

昭和44・9	3勝4敗	序二段	東84枚目
昭和45・1・29	相撲教習所修業		
昭和46・5・1	1勝6敗	三段目	西78枚目
昭和46・7	全勝	序二段	西19枚目
昭和46・7	3勝4敗	幕下	西56枚目
昭和53・7	「雷呉(らいこう)」と改名		
昭和55・9	廃業	幕下	東13枚目

大若松 好弘

稽古熱心、いつも大汗をかきながら砂まみれになっているが、相撲が真面目過ぎるため折角の努力が報われること少ない。三度目の入幕を果たした平成三年十一月場所も六勝三敗と快調に勝ち進みながら新入幕の武蔵丸戦で左膝を痛めて休場。習場所十両落ちして以来二度と幕内の土俵を踏むことはなかった。

しかし、ひたむきな稽古ぶりを師匠の大鵬親方は高く評価し、引退後はコーチ格に大抜擢。ようやく努力が目の見えた。

出身地 越谷市 平方

生年月日 昭和41・11・17(生まれは足立区竹ノ塚)

本名 若松好弘(身長一八七センチ、体重一四八キロ)

四股名 大若松(中川りおの弟) ↓大若松(おおわかまつ・「若」の中の「口」の上に「、」が入る)

所属部屋 大鵬

初土俵 昭和57・3月場所

十両昇進 昭和63・9月場所

入幕 平成2・7月場所

最終場所 平成8・3月場所

最高位 前頭13枚目

幕内在位 四場所

幕内成績 24勝32敗4休

勝率 〇・四二九

得意手 左四ツ上三投

年寄名 音羽山↓浅香山

行司 木村清次郎

出身地 越谷市 瓦曾根

本名 鈴木角太郎

所属 尾車部屋

生年 安政六年頃(一八五九)

死亡 大正九年二月二十一日

墓所 越谷市 瓦曾根 照蓮院墓地

十二歳頃、大相模の不動様(真大山大聖寺)で相撲を観戦。その時、力士団について行き、行司となる。行司としての観察眼は鋭く、「木村清次郎の宣配では・・・」と文句をつける者はいなかったという。但し、博奕が好きで身持ちが悪かったので幕内格までしか進級できなかった。大正九年二月二十一日、喘息がもとで死去。五十九歳。墓は菩提寺の越谷市瓦曾根の照蓮院に「行司中」によって建立された。

現在生家には、行司用軍配・正装写真・二十三世吉田追風の行司免許状一通(うち一通は、平成13年8月現在、行方不明)保存されている。

越谷周辺の力士と行司

高崎力

発砲島 五太夫大

出身地 春日部市 大場

本名 澤旗甚左衛門

地位 不明

元禄年間（一六九五前後）江戸力士として活躍。

現在、春日部市大場に「五太夫様」と呼ばれている碑がある。

□□井啓妙

沢旗家亡所銘

故沢旗甚左衛門氏元大場村ノ豪農力量強 元禄年間江戸力士ニ参加シ発砲島五太夫ト

呼 末孫淺次郎氏ニ故有テ上州前橋ニ住ム 云今回由縁才商議一決シ茲ニ氏ノ芳名ヲ

鐫万世ニ伝フ焉

時尔昭和廿年一月

有志者 原 幾蔵 (大場村)

原田昔之丞 (忍間新田村)

同 悦之丞 (風間新田村出身東京在住)

原 綾江 (大場村出身)

※なお、()内は、高崎力の調査による。原家と原田家は親戚関係。

右の記念碑の所在地は、春日部市大場。土地所有者は、越谷市風間新田の原田氏。

綴山^{しごやま} 喜平^{きへい}平^{へい}弘^{ひろ}泊^{はく} (初代 綴山)

出身地 三郷市茂田井 ※現在生家はない。地元で伝説の力士となっている。

本名 石井喜平治

力士名 不明

最高位 不明

宝暦12年（一七六二）三月場所より筆脇。

安永6年（一七七七）四月場所より筆頭。

天明4年（一七八四）十一月場所まで筆頭。

天明5年（一七八五）二月四日没。墓は三郷市にある。

註一「筆頭」とは「相撲会所」のトップ。「筆脇」は次席。

柏戸 宗了^{むねりょう}五郎 (年寄 伊勢ノ海)

出身地 草加市 弁天町

本名 大久保清五郎

三代目伊勢ノ海村右衛門の弟子。（註一）初代柏戸は北川辺町柏戸出身

奥州泉藩（福島県）本多越中守お抱え力士。

初め「滝ノ音清五郎」として前相撲から取る。

寛政4年（一七九二）三月、柏戸宗五郎と改める。

十一月、二十九歳で前頭二枚目。

享保元年（一八〇二）十一月、東の小締。相撲年寄差添人となる。
文化元年（一八〇四）十月、四年間無敗の雷電為右衛門に勝つ。
文化二年（一八〇五）二月、閑臨。相撲年寄差添。（芝神明社）。

この時「め組の喧嘩」起こる（芝神明社）。

文化3年（一八〇六）十月、相撲勸進元を務める。

文化5年（一八〇八）三月、四十二歳で大関となる。大関在位五年、成績58勝10敗4分、勝率八割五分。

文化9年（一八一二）十一月、四十六歳で引退し、年寄専務。

文化11年（一八一四）四月、四代目伊勢ノ海を襲名。差添・筆脇を務める。

文化13年（一八一六）二月より筆頭。

文化15年（一八一八）一月十四日、五十二歳で没。墓は深川万徳寺。

註一「差添」とは、勸進相撲における勸進元の補佐役。

「筆頭」とは、相撲会所のトップ。筆脇は筆頭の補佐役。相撲界は筆頭・筆脇が牛耳る。

小沼 克行

出身地 春日部市 柏壁

本名 小沼克行（昭和三十年八月十四日生）

部屋 鏡山部屋（元横綱柏戸の部屋）

昭和46年 名古屋場所初土俵。

昭和50年 名古屋場所初十両入り。

昭和51年 初場所十両優勝し、入幕（同三月）。

夏場所で足首骨折。

昭和53年 十一月、廃業。

最高位 前頭九枚目

行司 木村竹次郎

出身地 八潮市 八条

本名 萩野竹治郎（安政四年八月十三日生）

部屋 梅ヶ谷部屋

入門 明治14年9月（二十四歳）

死亡 明治32年6月16日（四十二歳）

☆主要参考文献等

大正8 喜田貞吉 民族と歴史第一巻第五号 日本学術普及会

昭和17 古河三樹 江戸時代の大相撲 国民体力協会

昭和38 和歌森太郎 相撲今むかし 河出書房

昭和51 中 英夫 武州の力士 埼玉新聞社

昭和52 西山松之助 江戸時代図誌第六巻 筑摩書房

平成3 半藤一利 大相撲こてんこてん ベースボールマガジン社

平成4 新田一郎 相撲の歴史 山川出版

平成5 大相撲力士名鑑 共同通信社

平成6 花咲一男 大江戸ものしり図鑑 主婦と生活社

平成13 大相撲人物大事典 ベースボールマガジン社

☆協力者・資料提供者

両国国技館博物館、深川富岡八幡宮、野見宿禰神社、芝大神宮（神明社）、開道弘一、鈴木正純、飯島理、

朝日・毎日・読売の各新聞

本朝相撲の濫觴として傳へられるのは、人皇十一代、垂仁天皇の七年、野見宿禰と當麻蹶速のそれである。——蹶速、強力、能く角を毀ち餉を申ぶ。豪語して曰く、四方に之を求むるに豈我が力に比ぶる者あらんや、何ぞ強力の者に遇ふて死生を期して力を争ふことを得ざる、と。天皇、群卿に詔して「當麻蹶速は天下の力士也、若し此人に比ぶる人有らん耶」と。一臣進んで、出雲國に勇士あり、野見宿禰といふ、試みに此人を召して蹶速に當らしめんは、と。こゝに宿禰を召されて、兩者を角力しめられた。(日本書紀) 結果は宿禰、蹶速を踏み殺すとあつて、此の宿禰の後裔が菅原家であり、その直系が五條家であつて、五條家の横綱免許のことも肯かれるのである。

降つて三十五代、皇極天皇の御宇に、百濟の使を饗した時に、健兒(雑役夫)をして角力せしめしと日本書紀にあり、これらに依つて相撲が代々朝廷に於て用ひられたことが推測されるが、かくして四十五代、聖武天皇の神龜三年に至り、相撲節會の盛典を見ることゝなつたのである。

相撲節會は、毎年七月を以て、諸國の防人を召して相撲を召合はせ、天皇御自ら南殿に出御あつて之を天覽あるの式である。相撲の重要な故實は悉く此の節會に發してゐるのである。形式も大切であるが、何よりもその心に於て重大なものゝあるべきことは、五十四代、仁明天皇の勅に、「相撲の節は雷に

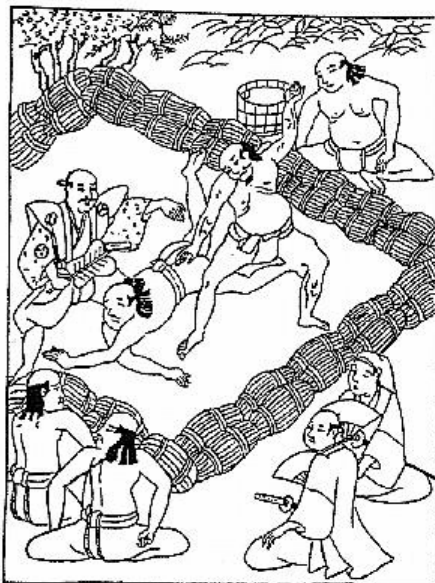
嬉遊にあらず、武力を簡陳する最も此中に在り」とあり、更に「宜しく越前、加賀、能登、佐渡、上野、下野、甲斐、相模、武藏、上總、下總、安房等の國をして角力の人を搜し求め貢進せしむべし」とこれを御奨勵あつたことは、相撲人の感拜するところのものでなければならなかつた。

斯くして意義深き相撲節會は、三百餘年の久しきにわたつて、朝廷の盛典とされたのであつたが、源平兩氏が權勢を競ふに至つて、平安の帝都、屢々兵塵を蒙り、保元、平治の亂を経るに及んで、遂に此の節會相撲は廢絶してしまつた。

「安元より以來絶えて其の名を聞くのみ口惜しきことなり」と著聞集の著者は嘆いてゐる。然し、朝廷儀式の相撲は絶えたが、相撲そのものは絶えたものではなかつた。盛典節會の榮を蒙つて、相撲のことはいよいよ國風に流布浸潤して根を張つてゐたのである。そこに相撲の國技たる所以があるのである。



人方屋(模写) 土俵の原型となったのは、相撲人を取り囲む見物人の輪である。「方屋」は本来は相撲人らの控え所をさす語だが、中世末期には相撲の競技場をさしてもちいられた。図は『近世奇跡考』挿し絵にみえる、近世初期の人方屋。



大坂相撲の四角土俵(模写) 南部の四角土俵は著名だが、大坂あたりでも初期には四角い土俵がもちいられていた。図は、井原西鶴『本朝二十不孝』挿し絵に描かれたもの。

勸進といふ事は、名高い辨慶の勸進帳の名が示す如く、神社・佛閣などの建立とか修繕とかの時に、衆庶を勧めて、淨財の寄附を求め、善根を積ましめて淨道に進ましめると云ふのが本意である。「願はくば貴賤男女、一紙半銭の小財を揮るなかれ、老少緇素、寸鐵尺木の微志に泥むなかれ、水滴も集りて巨海をなし、塵沙も積りて大山をなす。若し夫れ結縁の聲に於ては、現世には即ち福縁意の如くにして、息災延命の願を果たし、彌陀の誘引によりて、極樂往生疑あるべからず」などと云ふのが、勸進帳の極まり文句である。その勸進の一手段として、遊藝を興行し、衆庶の觀覽料金を集めて、建立修葺の資金に供する。是が勸進興行の起原である。今で云へば慈善音樂會の切符を賣り付けるなどが、正に是に相當する。而して其の音樂會の主催者が、即ち勸進元なのである。室町時代には、此の意味の興行として、田樂や猿樂が屢々行はれた。是れ所謂勸進能の起原である。普通の説では、後花園天皇の寛正五年に、鞍馬寺の僧善盛(善成)が、此の寺再建の爲觀世大夫を糺河原に誘して、三日の間猿樂能を興行したのが始だとある。此の時の事情は、「糺河原勸進猿樂日記」に詳しく見えてゐる。將軍義政之に臨んで勸世大夫に櫻頭なども多かつた。「彌州府志」に

凡そ勸進館と稱するは、中古以來沙門堂塔建立の時、芝居を舞へ、必ず觀世大夫を請して、猿樂を催ふす。其の始北山鞍馬寺に傳あり。善松院法師善成と號す。云云。鞍馬寺を再興せんが爲に、觀世大夫を只洲河原に請して之を催ふす。是れ勸進館之始なり。

勸進相撲の類

此の風習は、稍後の世までも継続したらしい。「京都御役所向大概覚書」に、「勸進相撲の事」と題して、元禄十二年から、正徳六年迄の間に、京都附近で興行された勸進相撲十七箇度の記事があるが、孰れも相當の理由を附して許可を得て居る。而も其の理由には必ずしも社寺關係とのみは限らぬ。廣義に之を解して、貧民救助・橋梁修繕なども其の理由として認められて居る。

元禄拾貳卯年岡崎村天王之社爲ニ修復、相撲相願七日敷免。

元禄拾四巳年東寺四家町宿次人足出町中因窮乏付、相撲相願七日敷免。

寛永四亥年朱奈村往還之橋爲ニ修復、相撲相願七日敷免。

などである。三都の勸進相撲の起因を云ふのも、實は公許を得て此の興行をする始と云つたに過ぎない。併し寛永に江戸で始まつたなどいふのは實は疑はしい。世に傳ふる寛永藩附は孰れも偽物である。勸進元の明石志賀之助の年代も違へば、仁王仁太輔などいふ相撲の存在も疑はしい。正保の京都千榮寺のも確とは言へぬ。かくて其の勸進といふ事は、いつしか全く本義が忘れられて、相撲渡世といふ事が公に認められ、所謂渡世の爲の興行が、勸進相撲の名で許可される事になつた。慶應三年度夏場所大相撲の時の願書は左の通。

年々以當付御福奉三申上候。

一私共爲ニ渡世、勸進相撲興行仕度旨。

日々、所々、江社札願置申度奉存候。此段御福奉三申上候以上。

大正十一年

寺社御奉行所様

勸進元 道手 風喜 太郎 印
差 添 玉 垣 頼 之 助 印

今や東京大相撲協會の様な立派な機關が成立して、今日の如き盛大な興行が行はれる様になつても、まだに勸進相撲・勸進元の名は、もとのまゝに附いて廻つて居る。

因に云、嬉遊笑覽に勸進相撲の名を説明して、
勸進と佛寺などの建立修繕の爲に興行するのみにあらず、其のこみは、等々勤むるを以て勸進と云ふなり。大正などには、彼勤化の爲にするをのみ勸進と心得たるにや、それ故千榮寺鎮守八幡宮再建の時を勸進相撲の始と云へるなるべし。

(新田貞吉 民俗と歴史第一巻第三章 日本学術普及会)

◎行司の階級

最高位立行司を頂戴に、三役格・幕内格・十両格……序ノ口格と、力士の地位に準じて定められている。行司の階級は装束や軍配の紙の色で表示される。最高位の木村庄之助は紫、次の式守伊之助は紫白、以下三役格が緑、幕内格が紅白、十両格が青白、幕下・二段目格が青、序二段格以下は黒をもちいることとなつてゐる。また、幕下格以下は裸足で土俵にあがるが、十両格以上は足袋、三役格以上は草履の着用が許される。烏帽子・直垂の装束は明治四十三(一九一〇)年からで、それ以前は袴であつた。



行司の序ノ口

(新田一郎)

相撲の歴史

山川出版

相撲の興行は寺社奉行の管轄。勸進相撲の名が示すように、寺社修復の費用を賄うとの名目で、寺社の境内で開催されたため。江戸での興行は春と冬(京都が夏、大坂が秋)、一場所が十日だから一年を二十日と暮らすといふ男興行の場所は、当初は深川八幡をはじめ市内各所の寺社を転々としたが、寛政年間からはほぼ西國の回向院境内。相撲は武芸でもあつたから、強豪力士はほとんどが大名のお抱え力士で、その藩の誇りがかかった。江戸中期以降は町人の間にも相撲熱が広がり、力士も歌舞伎役者に劣らぬ人気者となる。

寛政三年(一七九一)には城内で初の上覧相撲が催され、谷風・小野川、雷電などが活躍する黄金期を迎える。

武芸の一つであり勸進相撲でもあるから、女の見物は許されず観客は男だけ。

(花咲一男 大江戸ものしり図鑑)

主婦と生活社



相撲會所

(古河三樹 江戸時代の大相撲)

国民体力協会)

筆頭の権力 相撲會所の組織は、筆頭(正取
締)一人、筆脇(副取締)一人、組頭(検査役)
五人及組下(歩持年寄)、平年寄(給金五兩)等

江戸かわら版

雷電為右衛門

雷電と谷風はともに江戸大相撲の黄金期に活躍した花形力士だが、土俵上では相まみえていない。

雷電為右衛門は横綱にこそなっていないが、古今を通じて一位の力士。土俵生活二十一年間三十二場所をつとめた間に、二百五十四勝十敗で勝率九割六分、連続優勝七回という輝かしい記録は今後も破られない。

信州大石村(現東部町)に生まれた雷電は、松江藩松平家のお抱え力士となつて、寛政三年、西關脇に付け出され、同七年、谷風のおと西大関に昇進した。

森田画



雷電が横綱になつていないのは江戸時代の横綱は儀礼的審査だから。谷風との取組みがないのは向う西方だから。

(花袋一男

大江戸ものしり図鑑

主婦と生活社)



▲横綱谷風棍之助 著英画「谷風」
 仙台生まれ、伊達侯のお抱え力士二十七年七十場所負けがわずか二十回の強さ。



▲横綱小野川喜三郎 著英画「小野川」
 大津生まれ、久留米藩有馬侯のお抱え。西方大関として無敵を誇る谷風と相争った。

花婿一男 大江戸ものしり図巻 (注釋) (作者) (寄田)

と白眞子

彼は東の大関小柳常古等と共に其の選に中つた。

「龍神出湯日記」妻本後風 土記「引」に當時の状を記して

阿米婆訶始めて横濱に來りし時、米を造はさるとて力雄を撰ばれ米巻を運び入るに、力男なれば二俵も三俵も一度に持ち運ぶ中に、白眞子と名のる角力、極めて力強きが、臂に俵四つを負ひ、胸先に二俵をかけ、左右の手に一俵宛まげ、すべて八の俵を持ち運びけるにぞ、異國人も驚つぶれて、褒めたまへ候。此のかた、畫にも出で候と云ふ。人の力なん奇しきものにはありける。古物語にうへなひ難き俵の事もあれど、今の現にかゝる例あれば、古への事も疑ふまじきなりと思はる。

とある。「今日鈔」町書にも同様の事が出て居るが、それには其の俵が五斗俵であつたとある。挿繪は當時の實景の圖で、「斐太後風土記」から複寫したものである。



じんく「薑句」

薑句の意。また、橋後町の連九という人の始末ものという。郡士民謡。七・七・七五の四句から成る無節歌。題は地方によって異なる。(略)

——「広辞苑」(第一版)三〇一より

もちろん相撲語としての薑句は、相撲薑句である。江戸時代の享保年間にはじまる、というから、一七〇〇年代より歌われてきた。いまは、本場所では聞くことができない。引退相撲や福祉大相撲、暮暮大相撲、あるいは地方巡業のときにしか歌われない。巡業のおわり、華やかな土俵がすてすんだあとで、この歌がとつぷり暮れた野づらを流れるのである。観客はしみじみと、「ああ、相撲を見たのだな」という気分させられる。

・少露や伏見の角力ちりぢりに 蕪村

そもそもは、江戸時代、二丁り薑句というのがあり、これに相撲にちなんだ歌詞をのせて、三味線に合わせて歌ったのが、はじまりといわれている。

「お相撲さんにはとがまうて惚れた
種戸戻りのみだれがみ

（相撲にや負けても 怪我きまなけりや
腕に私が 負けてやる

「かけた願いが通じて嬉し
渡る面固 柳橋

これがそもそもの相撲薑句とは……。なんともイキなことであった。

ところがいざ自分で歌うとなると、節まわしが実に複雑きわまりなく、ずっと以前に、「当地興行も今日限り」としてはじまる、巡業のお別れに歌う代表的な文句を、森ノ里が吹きこんだレコードで、なんども練習したものであったが、どうにも恰好がつかなかった。

（当地興行も今日限りヨリ アー ドスコイ ドスコイ/アー 勧進元や世話人衆 こ

見物なる皆さまよ ハイ/いろいろお世話になりました お名残惜しうは候えど ハ

イ/今はお別れせにやならぬわれわれ発つたるそのあとは お家善昌町繁昌 ハイ

／悪い病に罹らぬよう 際からお祈り致します ハイ/これからわれわれ一行も/暫

く地方を巡業して 晴れの場所に出世して ハイ/またのご縁があったなら 再び当

地へ参ります ハイ/その時はこれに勝りしこひいきを どうかひとえに ヨーホホ

イ ハイ/アーアー願いますよ アー ドスコイ ドスコイ

すもうしゅくん

（海軍兵学校相撲守則）

- 一、体力ノ練磨 心気ノ鍛練ニ努ムベシ
- 一、礼節ヲ重シ規律ヲ守ルベシ
- 一、土俵ヲ戦場ト心得 試合ハ真剣寸時モ油断アルベカラズ
- 一、仕切、立合ノ整確ニシ 常ニ気力ヲ充実シ 敵ノ胆ヲ奪フノ氣勢アルベシ
- 一、常ニ機先ヲ制シ 敵捕果断 一突一倒ノ妙味ヲ獲得スルニ努ムベシ
- 一、攻撃ハ勇猛果敢 押シニツグニ押シヲ以テシ 敵ヲシテ防衛ノ暇ナカラシムベシ
- 一、敵ノ猛撃ニ動ザル胆力ノ養成ハモチロン 凛然タル気力ヲ以テ 敵ノ虚ニ投スルノ明断アルベシ
- 一、態度 姿勢ニ注意シ 高深ナル気品ノ養成ニ努ムベシ

いまになつて読むと、なにやら横綱審議委員会のジイサンたもがいいような文言ばかりであるが、なかには一二つ、現代の力士諸君が胸に刻んでおいてもいいような教えもあるようである。とくに「仕切、立合ヲ整確ニシ」はまず守ってほしい一行ではあるまいか。ところで、だいたい前に「子山部屋を訪問したことがあって、そのとき、「子山部屋十の心」という額が精古場にかかっていたのを、いま思い出した。古いメモ帳をさがしたら、そのとき書き写したのできた。いまもかけられているのだから確かか確かめてないが、これまた、なかなかいいことが書いてあったので、ご紹介しておこう。

（子山部屋十の心）

- 一、「おはよう」と言う親愛の心
- 二、「はい」と言う素直な心
- 三、「すみません」と言う反省の心
- 四、「どうぞ」と言う謙讓の心
- 五、「私がいす」と言う奉仕の心
- 六、「御禮様」と言う謙虛の心
- 七、「ありがとう」と言う感謝の心
- 八、「お疲れさん」と言う労りの心
- 九、「なにこそ」と言う忍耐の心
- 十、「嘘をつくな」と言う正直の心

いかにも、土俵の鬼、若乃花らしい「相撲守則」とはいえないか。

（半蔵一羽 大相撲ごてんごてん ベースボールマガジン社）

免許状

團扇紐紅色令免許畢

以來相用可申候依而

免許状如件

本朝相撲司御行司
第二十三世

大正二年三月十五日
吉田追風

木村清次郎とのへ

資料提供者 鈴木正純氏



資料提供者 鈴木正純氏

「免許状

方屋之内上足袋令免許

畢以來相用可申候依而

免許状如件

本朝相撲司御行司

第二十三世

明治四十三年 吉田追風 花押團

三月十七日

木村清次郎とのへ

「免許状

團扇紐紅色令免許畢

以來相用可申候依而

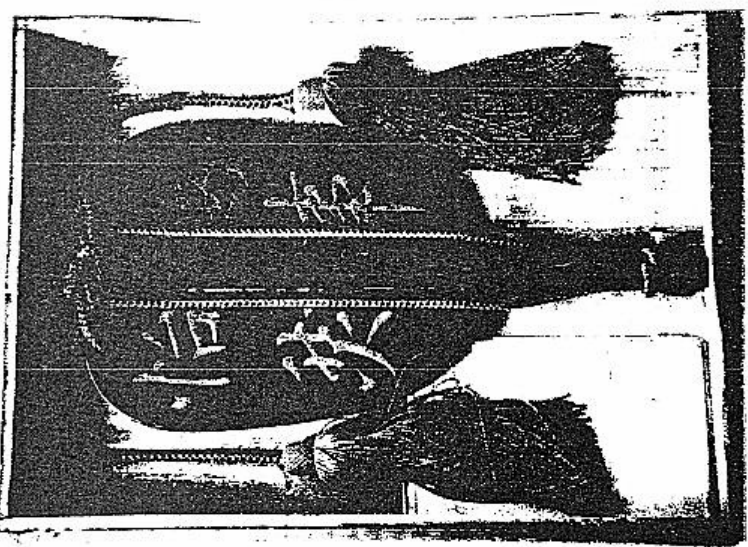
免許状如件

本朝相撲司御行司

第二十三世

大正二年三月十五日 吉田追風 花押團

木村清次郎とのへ



松若大 がんばれ

本県から14年ぶり入幕

越谷出身 名古屋場所へファイト

二十五日に発表された大相撲名古屋場所の番付で、越谷出身の大若松(本名・若松好弘)が、大鵬部屋が待望の新入幕を果たし、本県出身者としては、昭和五十一年春場所の小沼(春日部市出身、嶺山部屋)以来十四年ぶりの幕内力士誕生となった。

後援会、大鵬の化粧回し贈る



「欠点を直しがんばる」と力強い大若松

大若松は東京生まれだが、小学生の時に越谷市内に引っ越し、同市立平方中を卒業して角界入り。東十両三枚目で迎えた先場所、十一勝四敗の好成績を上げ、新入幕を遂げた。

大若松は同日、名古屋場所の宿舎の津島神社(愛知県津島市)でここまでの来れたとは信じられない。番付を見て親方(元横綱・大鵬)に報告したら、今まで以上にけいこするようハツパをかけられました。ワキが甘く、腰高の欠点をけいこで直していきなさい。体調

もまずまずなので、名古屋場所では、得意の前へ出る相撲が取れるよう頑張ります」と話していた。

一方、大若松の父親で観光バス運転手の若松守男さん(五十三)と姉や、母、実兄夫婦などが住む草加市長栄町の実家では、母親の敬愛さん(五十七)が「今朝のテレビニュースで知り、家族全員で喜び合いました。これからますます大変なので、頑張りがや病気に注意して、頑張ってください」と思っています。

とにかく新入幕は応援してくれた皆さんのおかげです」と喜びをかみしめていた。

また、六十三年九月場所まで十両入りした時に結成された出身地・越谷市の後援会(飯島理事長、会費九十九人)では、勇壮な大若松(たか)の絵柄の化粧回しをお祝いに贈ることを決めた。大鵬部屋の関係者などから相談したうえで名古屋場所後の来月下旬にも越谷市内で祝賀会を開きたいとこころを語っていた。

松若大



(資料提供者・開道弘)



資料提供者 開道弘一氏

